

||||||| 記 事 |||||||

消 息

横浜の山手病院は1863年に居留民のために建てられた病院で、明治・大正・昭和の戦前・戦後と激動の時代を生き延びた個性的な病院であったが、1982年に廃院となり、120年に近い歴史を閉じた。廃院時の院長であった井出研先生から編集委員会宛に、「この度1863年に起源をもつブラッフホスピタルについて歴史的記述と、元英国総領事マルコム・エドワーズ氏の遺稿が手元にあるので、当該病院の名物的存在であった銘板の由来（とくに人名）が述べられているので紹介したいと考えていました。」とのお手紙とともに原稿が送られてきたので、以下に紹介する。

山手病院 (Bluff Hospital) の銘板に刻まれた人名を巡って

——元英国領事 Malcolm Edwards 氏の手記より——

井 出 研

神奈川県予防医学協会中央診療所

山手病院は1983年に1867年からの永い歴史を閉じた。120年近く続いたヨコハマに初めてできた外国人専門の病院であった。この病院にほとんどは戦後であろうが一度でも足を踏み入れた人は古い建物の玄関ロビーの右手の壁に目を奪われる(図1)。後日、人に語る機会があると「名誉院長」の名が刻んであったということになる。

筆者は病院閉鎖時の院長であったのだが超多忙でゆっくり見ている暇などなかった。その後、当時秘書であった稲垣康子氏から元英国領事 Malcolm Edwards 氏の小文を戴いた。その中に銘板に刻まれた人々についての寸描が記載されていて今まで知られている医史学上のことはさておいて大変興味をもたれた。ところがよく読むと Edwards 氏が Roll of Honour として挙げた人名(表1)と実際の銘板——これも Roll of Honour であるが——とはくいちがいがあるのが判った。即ち Edwards 氏が挙げている人でも銘板にはなかったり、また銘板にはのっているが Edwards 氏のリストにはなかったりしている。ちなみに Edwards 氏のリストは26名1団体の27、銘板では27名1団体の28である。こ

の両者には極めて近い関係があるものと思ひ、さらによくみるとリストは Appendix I (補足) としてあるのは判るがその下に suggested となっているのに目をとめた。これは Edwards 氏が銘板を作るにあたって彼なりにリストアップをした「案」なのであろう。とすると実際には後日、銘板作製委員会とでもいう会合が開かれてその人達の間でも二三の変更(削除、追加)がなされたかもしれない。Edwards 氏はその点には触れてはいないので、もしかしたら彼個人の意見だけであったかもしれない。手記の配布先(Distribution)は Mr. Williams, Mr. Bush, Prof. Grauert, Mr. White, Dr. Kitson の名が個人名で挙げていてあとは病院の committee, Ladies committee の各委員と何人から適当に選んだ人達となっているので、この人達の意見をとり入れようとした可能性はあるが配布先に改正リストを含めて披露しながら(And for suggested amendments) という括弧つきの説明がついているところを見ると、とくに委員会などはつくらずに Edwards 氏がほとんど一人で考えた可能性が高いと思われる。

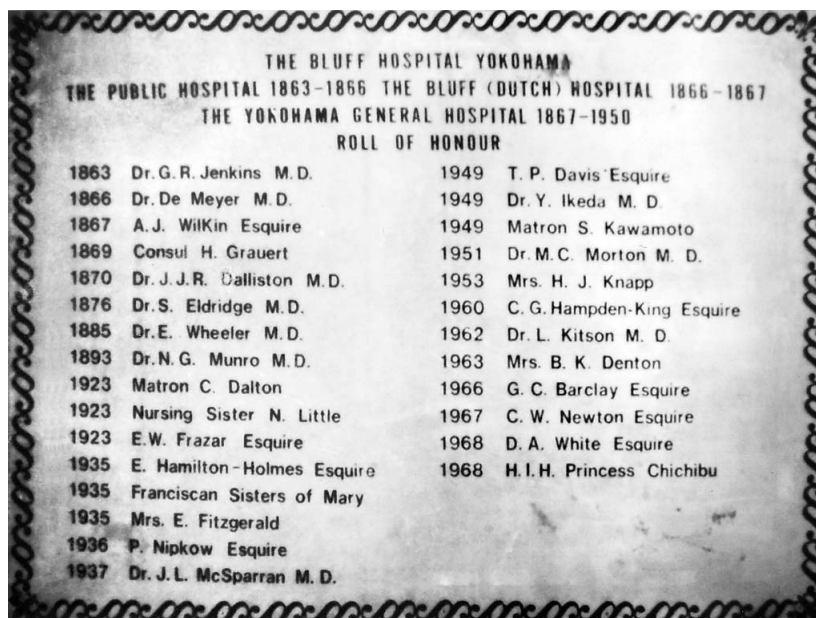


図1

実はEdwards氏の手記は以上で終わりかと読んでみると一番最後になって suggested amendments for roll of honour としてさらに次の人名とコメントが書かれていた(表2)。

以上が最終的かどうかは判らないが案のまとめとするとDr. EldridgeとFrazerが追加され、Dr. WheelerとNipkowの任命年月が訂正されている。Paunceforteは記録がはっきりしないということで削除されている。Mother Roberteは個人名というより一団体名のフランシスカン派ということで決着

がついたようである。が、Dr. Myburghについては最終的には削除されているがEdwards氏にはこれには触れていない。以上で元英国領事Malcolm Edwards氏の手記が偶々、銘板について触れそれが選考の基準は未だ不明であるにしてもその経過が多少とも推考されていることが判った。しかし銘板の最後の一人Edwards氏の手記では触れていない秩父宮妃の挙げられている理由とそれに肝腎のMalcolm Edwards氏については調査中である。

追補 (Appendix) I

表1 Roll of Honour—The Bluff Hospital

年月日	姓名	Reason for Inclusion (☆ ¹)
1863	Dr. G. R. Jenkins	ヨコハマにおける最初の外国人病院の創始者
1866	Dr. De Meyer	ブラフ ホスピタルとしての創始者(☆ ²)
1867	A. I. Wilkins Esq.	Yokohama General Hospitalの創始者
1867	Dr. Myburgh	最初のCommitteeのChairman
1869	Consul H. Grauert	初めて病院拡張を計画したChairman
1870	Dr. J. I. R. Dalliston	最初のレジデント(☆ ³)
1880	Dr. E. Wheeler	レジデント(☆ ³)
1882	Nursing Sister Paunceforte	最初のMatron(婦長)
1893	Dr. N. G. Munro	(手書きで加えている)(☆ ⁴)
1923	Nursing Sister C. Dalton	大震災時のMatron

1923	Nursing Sister Little (☆ ⁴) (first name の記載なし)	大震災時の主任看護婦
1935	Hamilton-Holmes Esq.	再建築のための借地権を確固にした
1935	フランシスカン派メリー修道会	1949年まで看護婦を派遣しつづけた
1935	Mrs. A. Fitzgerald	最初の Ladies Committee の Chairman
1937	P. Nipkow Esq.	震災後再建病院の Chairman
1937	Dr. J. L. McSparran	震災後再建病院のレジデント
1949	T. P. Davis Esq.	第2次大戦後再開病院時の委員長
1949	Dr. Y. Ikeda	日本人初のレジデント
1949	Matron S. Kawamoto	日本人の初めての看護婦長 (Nursing Sister)
1951	Dr. M. C. Morton	初代の院長 (Medical Director)
1953	Mrs. H. J. Knapp	戦後初の女性 Chairman
1960	C. G. Hampden-King Esq.	看護宿舎建設時、自由土地所有権行使の任期中の Chairman
1962	Dr. L. Kiston	指定 (常勤) (Appointed Director)
1963	Mrs. B. K. Denton	女性委員長
1966	G. C. Barclay Esq.	初めて大規模拡張を企画した Chairman
1967	C. W. Newton Esq.	拡張計画の小委員会の財務担当 (Director Finance)
1968	D. A. White Esq.	拡張時の Chairman

☆¹ Inclusion は訳しにくい、後日銘板の中に取り入れるという目的のために使ったか

☆² 山手にあったオランダ系病院に合併吸収して外人専用の病院プラフ ホスピタルとなった。

☆³ レジデントは常勤医のこと

☆⁴ 訳者 註

追補 (Appendix) II

Dr. Wheeler

1885年のヨコハマ名鑑に Dr. Eldridge の助手 (assistant doctor) として任命されたと初めて記載されている。彼の死は何人かの生証人や Japan chronicle ではっきりしているが関東大震災の朝、友人の Tom Abbey を訪ねていたが大通りに逃げようとして (あるいは海岸に) 火に巻かれた。Wheeler の助手であった Dr. イシウラは通常なら他の仕事をしていたのにやめさせたといわれているがイシウラも死んだ。

Dr. Munro

1893年あるいは1892年ともいわれているが Yokohama General Hospital の院長に任命されたといわれているが Medical instructor だという人もいて Dr. Wheeler と何年か一緒に働いた。

彼はよく訪れていたアイヌの結核に関心を持っていた。アイヌのためにはそのルーツや文化の理解者であり、彼らの生活の向上を図った。彼はまたアラビア語、サンスクリット、漢字や漢語に熱心であった。

Nursing Sister Paunceforte

夫は George Paunceforte (e を綴っている) で根岸のシェクスピア旅館 (Shakespeare inn or Hotel) の経営をしていた。1897年には登録されている。その頃の病院名簿には夫人の名はないが、看護婦はよく省略された。彼女の背景は判らないことがあるので名を削除されたのだろう。彼女は看護婦であったが役者の George Paunceforte と結婚し、病院では仕事を続けていた。彼女の娘も病院で働いていたとはありうる話である。

表2

1876	Dr. Eldridge
1885	Dr. Wheeler (1880年ではない)
1882	Nursing Sister Pauncefote (不十分な証拠)
1893	Dr. Munro (以前の案では手書きされていた) 訳者注
1923	E. W. Frazer Esq. (大震災時の Chairman)
1935	Reverend Mother Roberte (聖母マリアのフランシスカン派の総婦長 (Mature superintendent))
1936	P. Nipkow Esq. 1936年の任命で1937年ではない。

Note: Dr. イシウラの名は日本人の医師名として始めて記載されている。(最初でないかもしれない) が彼が病院に関係したという記録はないし、また彼がスタッフに加わっていた時の記録はない。

例会記録

日本医史学会 11月例会・神農祭

——斯文会と合同開催——

平成25年11月23日(土・祝日)

湯島聖堂(斯文会館 講堂)

神農像の優品——杏雨書屋所蔵 小曾戸 洋

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会 合同12月例会 平成25年12月14日(土)

順天堂大学医学部センチュリータワー16階北フロア

1. One Healthの潮流 山田章雄
2. 歯科医院があった街角——東アジア編 竹原直道

3. 占領期における看護技術教育

——使用されたテキストと当時者の証言から——

滝内隆子

4. 佐賀藩が安政五年に購入したオランダ語の
医学書について 小澤健志
5. 祖父 三浦謹之助の思い出 三浦恭定
6. 我国における抗生物質医薬品の発展 八木澤守正

日本医史学会 1月例会 平成26年1月25日(土)

順天堂大学医学部センチュリータワー16階北フロア

1. 19世紀初頭の日本における「温疫論」の受容 西巻明彦
2. 片山國嘉の精神病学 岡田靖雄